

家庭とビジネスの両立 田淵裕哉

ビジネスオーナーを目指したおかげで、素晴らしい仲間と一緒に事業を拡大させながら愛する家族との時間を十分にとることができています。自分自身で物事の優先順位を決め、時間を自由にコントロールできるからです。しかし、自由であるがゆえに、まずはしっかりとビジョンや価値観を持っていなければなりません。家庭とビジネス、両方の成功を望むとき、当然ながら両方を大切に思っていることが大前提となります。

理想の夫婦像

若いころから、わたしは家族というものに対してひとつのビジョンを抱いていました。それは、23才のときに出会ったあるアメリカ人夫婦の姿でした。日本では自分の身内を謙虚に（低く）言うのがふつうですが、その夫婦は純粋に互いを誉め合い、子どもたちも両親を誇りに思っていました。それを見て衝撃に近いものを感じ、「ああ、家族っていいな。将来結婚したら自分もこういう夫婦関係を築こう」と強く思ったのです。

人生をトータルに考えると最終的には夫婦ふたりになりますから、そこをイメージした人生設計が必要だとわたしは考えました。仕事での成功は、その場で大きな満足感をもたらしますがあまり長つづきしません。けれど、夫婦の良い関係は永続的な満足感をもたらすものだと思います。

後に、恵まれて最愛の女性と結婚し4人の子どもを授かったわたしは、理想の家庭を築くためにいろいろ努力をしました。子どもが小さいときは、毎週1回順番に一人ひとりと“デート”もしました。そんな中、あるとき家で大失敗をしました。夜中に大声で泣きつづける子どもを、つい感情的に手を出してしまいました。その後の気まずさといったら...。信用は、築くまで何年もかかりますが、失うのは一瞬。子どもは親が思うよりずっとデリケートで、わたしたちが投げかける何気ない一言にもものすごい影響を受けるのです。痛い教訓でした。デートのときすぐに気持ちをこめて子どもに謝り、以後一層の愛情を示すように気を配りました。そして、それにも勝る愛を家内に示しています。わたしは夫婦の仲が良いときに最高の幸せを感じ、何でもできるような気分になります。

仕事の成功は 家族の幸せのため

わたしは、大事な家族が幸せになることが最終的な目的であるとわかり、ビジネスの成功は、その目的を達成するための目標であることを明確にしました。

わたしにとって家庭とビジネスは、もともと相反するものではなく、密接に結びついているものです。仕事で成功したいのはなぜか。家族を幸せにするためです。男にとって、仕事で成功するのはひとつの事業。でも、家族を幸せにするのはもっと大事な事業だと思っています。

最初から優先順位が一番は家族と決めていますので、どんなことがあっても家族を優先します。

実践していること

わたしは良い家族関係を築く鍵はコミュニケーションの量と質だと思っています。

まず、ずーっと実践していることは毎朝の夫婦の散歩です。子育てや夢などいろいろな話をしながら夫婦の時間を楽しんでいます。家族の核となる夫婦関係を密接にしてくれる

すばらしい方法です。

また、バスケットでくたくたになって帰宅した子どもたちのマッサージを夫婦でしています。このような子どもとのスキンシップも立派なコミュニケーションです。言葉ではなく、「わたしたちがあなたの一番の応援者だよ」という無言のメッセージを送っています。

さらに日曜日は仕事をしないで家族の時間と決めました。画期的なのは日曜日にはテレビも見ないということを家族で決めたことです。おかげでやることなく、家族で話したりゲームをしたり、おいしいデザートを食べたりして夜を過ごしています。やることがないというよりも、たくさんの有意義なやるが増えました。

みんな家族

ここまで自分の家族の話ばかりしてしまいましたが、ビジネスのパートナーたちも、実際わたしにとって大切な“ファミリー”です。

家族との時間を取るために早寝早起きを実践しています。朝の時間はとても静かで仕事のはかどります。ひとりでできる仕事は朝食前に済ませることができます。

心の安定と幸せの源

ビジネスオーナーを目指す起業家は働いていれば給料をもらえるという世界ではなく、立派な経営者です。ある意味で厳しい世界です。いろいろなストレスを抱えながら取り組んでいると思います。そのときに夫婦の関係がよければ、心が安定して仕事にもよい影響を与えます。夫婦関係さえよければ、わたしは何でもできるという気持ちになります。夫婦関係が悪いと、たとえ仕事がうまくいっても落ち着かないし、何をやってもむなしいような気がします。

人はひとりでは幸せになることができません。一番身近な家族や大切な人たちとの関係をよくし、そしてビジネスパートナーともよい関係を築いて家族のように楽しく仕事をす。わたしは人との交わりを通して得られる喜びこそがビジネスの最大の魅力だと思っています。